

学部・研究科名 応用生物科学部

学部長・研究科委員長名 山本 祐司

学科名・専攻名 農芸化学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	昨年度、完成年度を迎えた現行のカリキュラムについて、全体的な振り返りを行い、次回のカリキュラム改正への作業内容を設定した。	学科卒業生や就活産業の専門家による講演を聴講し、学生個々の将来像を明確にし、大学での学びの意義を確認させている。	各学期において、進級・卒業判定を学科教員全員で情報共有した。学年担任や研究室教員により、該当学生への指導を実施した。	シラバスへ掲載している開講科目毎の目的・目標などについて、学科教員間で相互に確認を行い、学生の授業評価により、その達成度を把握している。	大学が実施したアンケート結果を解析し、学科の教育課程の課題を抽出した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 自分の将来像を具体的に模索することで学習意欲を向上させる。	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 社会で活躍する学科卒業生による体験談を聴講する。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 専門分野の学びについて、卒業生の評価が芳しく無い。	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 専門分野の学びについて、卒業生の評価が芳しく無い。
	【課題】 教育課程の全体的な見直しを行い、次回のカリキュラム改正へ向けて準備する。	【課題】 継続的に実施する。	【課題】 継続的に実施する。	【課題】 継続的に実施する。	【課題】 教育課程の全体的な見直しを行い、次回のカリキュラム改正へ向けて準備する。
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	学生募集及び入学者選抜の制度や体制については、各々の日程に連動して、適宜、学科会議を開催し、学科教員内での情報共有と課題の抽出を行い、改善策を講じた。入学者選抜については、入学センターからの提案を元に、学科教員間で協議し、公正に実施した。	在校生の成績や就学状況を入試制度毎に追跡調査し、学科教員内で情報共有した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 見学会や説明会の開催や広報誌の利活用により、農芸化学科の特色を受験生に対して広く発信することができている。	【長所】 年内に実施する各種の選抜と、年明けに実施する一般入試及びセンター入試による選抜により入学した在校生間では、成績において特に大きな隔たりは認められず、何れも有効な制度であった。
	【特色】 農芸化学科はその専門領域の広さから、入学生 of 将来の可能性を広げることができる。また、自分の将来性に関する周辺領域も専門的に学修することができる。	【特色】 特色ある多様な選抜制度を設けることで、入学した学生の意識や入学までの履歴も多様となる。それらの価値観を互いに理解し合うことで、学生相互の成長が見込まれる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 18 歳人口の減少やコロナ禍の影響を受け、受験者週の減少や合格者の偏差値が低下する傾向にある。	【問題点】 なし
	【課題】 農芸化学や農学・生命科学の魅力をさらに積極的に受験生へ発信する。効果的に発信手段の構築には、受験産業に精通した専門家の意見を仰ぐことが必要となる。	【課題】 なし
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学の方針に則り、学科の教員組織の編成に関する方針を明示し、意見交換を行っている。	研究室毎、基本的に 3 名の教員を配置し、教育研究活動を展開している。	学科教授会を随時開催し、学科教員の募集、採用、昇任の方針について情報共有と意見調整を行っている。	複数教員を配置した研究室及び学科会議において、情報共有と意見交換を行い、教員の資質の向上を図っている。	学科会議において、学科教員間での情報共有と意見交換を実施している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 複数教員による学生対応により効率的に学生教育を行うことができる。	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 複数教員による多角的な視野により、教育研究を遂行できる。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名					

学部・研究科名 応用生物科学部

学部長・研究科委員長名 山本 祐司

学科名・専攻名 醸造科学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	カリキュラム・ポリシーに基づき、基礎的基盤的知識の習得に関わる科目を初年次及び2年次に重点的に配当し、3年次では応用的な科目、4年次ではそれらを統合した卒業論文、醸造科学特別演習、醸造科学特別実験を必修科目として配当することで、段階的、体系的に学べるように教育課程を編成・実施している。	1 年生のフレッシュマンセミナーにおいては、3 つのポリシーと研究倫理について説明する時間を設けているほか、学習目的を明確にする工夫を講じている。また、教育効果をあげるために、インターンシップ型の実習を基礎と応用を十分に学び終えた 3 年次後期に配当している。	入学時に1年生全員に対し、ガイダンスやフレッシュマンセミナー、共通演習で進級・卒業要件を明示・説明している。各教員がシラバス記載の成績評価基準に則り、適切に単位を認定している。学位授与については、学科教員会で審査を行い、全員一致をもって授与の可否を決定している。	卒業年次学生に対して、学生調査を実施することで、学生のディプロマ・ポリシーへの達成度を把握、評価している。また、定期的に学生の GPA を把握することで、GPA が低い学生について個別の指導を実施している。さらに、学生対象の授業評価アンケートを元に授業の改善を行っている。	カリキュラム委員会において時間割編成の適切性について検討を行っている。卒業年次学生に対して行う学生調査の回答結果から、教育課程の内容と方法がディプロマ・ポリシーを達成するために適切であったかを点検することで、教育課程の内容・方法の適切性の評価を行なっている。また、各学年の GPA 分布の形状や平均・ばらつきから、教育課程の内容と方法が適切であるかを確認している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】学生の社会的及び職業的自立を図るために、3 年次にインターンシップ型の実習科目を取り入れている。	【長所】企業や公的機関とのつながりを生かし、学習状況に応じて実産業について学ぶ機会を設けている。	【長所】適切に成績評価、単位認定を実施している。	【長所】学科のディプロマ・ポリシーが明解であるため、学生調査に基づいた学生の学修成果を把握しやすい。	【長所】全学生についての GPA データは、大学から毎年決まった時期に開示されるため、定期的な点検が実施できている。
	【特色】4 年生の卒業論文を必修科目として位置付けることで、3 年次までの学習内容を統合して理解できるように配慮している。	【特色】専門性が高い学科のため、学生の目的意識が強く、関連企業の講演などにより、効果的に学生の修学意欲を活性化できている。	【特色】なし	【特色】学科のディプロマ・ポリシーが明解であるため、学生調査に基づいた学生の学修成果を把握しやすい。	【特色】GPA 分布は全ての学年で毎年算出している指数であるため、客観性があり、学科間や学年間での比較も行える。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】教育内容を段階的に設定しているものの、初年次学生の基礎学力に幅があるため、特に化学系科目において、理解不足のまま進級する学生がいることが挙げられる。	【問題点】必修科目では、授業履修学生数が 150 人を超えるため、学生全員に均質な学修意欲を持たせる工夫が難しい。	【問題点】なし	【問題点】1, 2, 3 年次においては、GPA 以外の学修成果の把握は充分ではないことが挙げられる。	【問題点】現時点では、学生調査の結果を個々の教員の授業改善等に全面的には生かし切れていないと思われる。
	【課題】入学後の教育において基礎的項目についてフォローする体系的なサポートを行うことが望ましい。	【課題】上記問題点について、学科教員で改善点について議論・共有すると共に引き続き工夫する必要がある。	【課題】なし	【課題】高学年での学修の基盤として必要となる、低学年次の化学・生物系基礎科目の学習成果を正確に把握する方法を検討する必要がある。	【課題】学生調査の結果において、ポイントが低かった項目について、教員が改善する意識を持つよう周知する必要がある。また、GPA 以外の客観的な学習成果の評価方法を模索する必要がある。
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	本学科のアドミッションポリシーに基づいた内容で高校生に対する情報発信を行い、学生募集を行なった。大学の定めた入学者選抜制度の枠組みの中で、アドミッションポリシーに則った入学者の選別を行なうため、学科内に基準を設定し、それに基づいて公平・適切な選抜を行なった。いずれの型の入試においても、学科教員全員による厳正な審査により、可否の判定を行なった。	毎年年度始めに、本学科在籍者全員の学籍データ（入試制度・GPA 記載のもの）を教員全員で共有し、入試制度および学生受け入れの適切性について点検・検証を行なって、次年度の入学者選抜の際に生かしている。また、本年度は、コロナ対策にともなう入構制限により例年新入生に対して実施しているアンケートを行うことが出来ず、募集や学生受け入れの適切性に関する点検・評価を行うことが出来なかった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 将来、酒類・食品製造・環境浄化、エネルギー開発等の微生物利用産業の発展に寄与する意欲を持つ学生を、色々な側面から広く集めることができている。	【長所】 カラーのはっきりした学科であるため、学生の傾向を把握しやすい。
	【特色】 醸造科学に興味・関心をもつ学生のみならず、実際の醸造業の後継者の受け入れに成功している。	【特色】 学生の志向の面からは、受け入れは概ね適切に行なわれていると考えられる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 入試制度が多岐に亘るため、本学科アドミッションポリシー（1）の項目について若干不適合の学生が一部発生している。	【問題点】 入試制度が多岐に亘るため、学科の方向性と学生の志向とのマッチングは概ね良いものの、学生間の学力のバラツキが若干大きめの傾向がある。
	【課題】 大学入学後のリメディアル教育等を充実させ、入学後の就学に支障をきたさないようにする必要がある。	【課題】 入試制度にかかわらず、本学科のカリキュラムおよびディプロマポリシーに対応できる学生を入学させる努力と工夫が必要である。
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☐ 一部行っている ☒ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	現在の教員配置は、完全に方針を反映した形となっている。	本学科は研究室ごとに明確な醸造の対応業界を持ち、一研究室 3 名の教員構成（年齢・職階的なバランスも考慮）となるよう、随時適切な募集・採用・昇任を行なっている。この方針および大学の人事方針に則り、本年度も新規採用教員の募集を行ない助教 2 名を採用、3 名が昇格となった。	コロナウイルスの対策のため FD に関する説明会への参加や各種部会での活動が制限される中で、醸造食品部会などをオンラインで実施した。	6 研究室体制で活動を行なうにあたり今後、学科の教員組織の適切性について検証を行なう必要がある。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 編成方針と齟齬がなく、学界・業界の双方に対応可能な教員配置となっている。	【長所】 教員組織の編成方針が明解なため、募集の際の条件も明確である。	【長所】 学科の方向性が明解であるため、資質の向上を図る機会を設けやすい。	【長所】 なし
	【特色】 教員組織の編成方針が明瞭である。	【特色】 国内でも数少ない発酵・醸造専門の研究・教育機関として機能することが可能な教員配置となっている。	【特色】 なし	【特色】 伝統／先端、教育／研究、産／学のバランスのとれた学科活動に向けての研鑽を行なっている。	【特色】 醸造科学分野において、より効果的な教育・研究を実践できる教員組織となることが予想される。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】	【問題点】 学科として目指すものが多く、教員のオーバーワークに繋がってしまう。	【問題点】
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 1 研究室 3 名の研究室体制となるように発酵食品化学研究室内の助教 1 名の公募をする必要がある。	【課題】 一部の教員に負担が集中しないように、教員配置に沿って、全員が業務を適切に分担する。	【課題】 1 研 2 名体制の研究室があり、教育研究の充実の観点から 3 名体制へ移行する必要がある。
根拠資料名					

学部・研究科名 応用生物科学部

学部長・研究科委員長名 山本 祐司

学科名・専攻名 食品安全健康学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	今年度は 2018 年度に新たにスタートした新カリキュラムの完成年度であり、カリキュラムポリシーに則って、食品の安全性と機能性について両方を十分に学ぶことができ、加えて科目間の連携と専門性を検討した科目編成になっている。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止策に従い、授業開講形態が Web 教材で行った科目が一部あるものの、多くの科目で対面授業を実施した。例年通り、初年次教育としてフレッシュマンセミナーや食品安全健康学概論、共通演習を通して、大学生活および授業の概要に接する機会を設ける工夫を行っている。また、卒業年次生の卒業研究については、研究室活動がほぼ通常に戻ったこともあり、これまでオンラインを中心に行ってきた学生教育・経験を充足する対応を行った。	1 年間及び各学期に履修登録できる単位数をそれぞれ 49 単位、25 単位と設定し、各科目を十分に予習、復習ができるようにしている。シラバスには、授業の目的、到達目標、取り扱う領域、各回で行う内容及び準備をしておくべきこと、学んだことが活用できる領域、評価の方法等を記載し、学生の学習を活性化できるようにしている。 学習量が多い科目に関しては、適宜中間試験を設け、中途における習熟度を確認している。また、小テストなどにより前回学んだ項目について、各自理解度を確認させている科目を設けている。	単位制度および学位授与は、1 年次に学生全員に配布する学生ハンドブックに記載し、入学オリエンテーションにて学生に周知している。各教員が担当科目に対して、シラバス上で評価の方法を記載し、それに則って単位認定を行っている。卒業論文審査は、学科各研究室において、研究室全教員出席のもと、卒業論文発表会を行い、審査した。	「農学概論」において農学全般の分野に触れさせた後、「食品安全健康学概論」において学科の分野および研究室の概要の説明を行った。こうした科目では、S~C 評価だった学生が 98.8%（農学概論）、98.1%（食品安全健康学概論）だったことから、学生へのディプロマ・ポリシーは概ね周知できたと考える。配当基礎科目における単位取得率は、ほとんどの科目で 90%以上となっているものの、新型コロナウイルス感染症禍のためか、80%程度の単位取得率の科目も一部見られた。基礎科目の平均 96.2%、専門コア科目 95.7%であった。(資料 1) また、GPA が低い学生には、後期試験終了後に学年担任の教員と面談をして個別に指導を行った。	年度ごとに、各科目において学期末、学生アンケートを実施し、その結果を各教員に配布して、次年度以降の授業に役立てるようになっている。 旧カリキュラムでのアンケートをもとに、各学年の学習成果を鑑みて、2018 年度から新カリキュラムで施行した。新型コロナウイルス感染症禍という想定外の事態が生じたこともあり、今年度に新カリキュラムの成果を評価することは困難であると思われるため、来年度以降まで経年経過を追う必要があるが、引き続き、化学の習熟度をさらに増すために、基礎科目である「化学」および「基礎化学演習」を中心に理論習得と演習による補強を行い、「基礎化学実験」において実習による基礎知識の定着に取り組んだ。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】	【長所】	【長所】	【長所】	【長所】
	【特色】 2018 年度にスタートした新カリキュラムにおいても、食品の安全性・機能性に関して、基礎から応用まで幅広く学べる編成になっている。	【特色】 学習量が多い授業に関しては、中間テストを設けるなど、前回学んだ項目を確認させるための小テストを実施した。	【特色】	【特色】 新型コロナウイルス感染症禍の Web 開講形態においても座学の理解度、さらに後学期では入構にて行った学生実験の習熟度について数値で把握できた。	【特色】 2018 年度に化学の習熟度を上げるカリキュラムに改訂した。新型コロナウイルス感染症禍もあったため、その成果は来年度以降に評価する。

現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 化学を十分に学んでいない学生が多い。	【問題点】	【問題点】	【問題点】	【問題点】
	【課題】 今後、科目間の関連を明確に説明し、化学の基礎から卒業研究までの連携を検討することが求められる。	【問題点】	【問題点】	【課題】 今後のカリキュラム改変において、学生アンケートから問題点を探し出し、改善を図ることが必要と考える。	【課題】 新カリキュラムの問題点を洗い出すため、数年間は学生の士熟度に注意しながら学科の特徴を際立たせるカリキュラムを作成していく必要があると考えられる。
根拠資料名				資料1 2021 年度単位取得率	

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	入学センターと協力して、大学ホームページや大学案内等においてアドミッション・ポリシーを公開している。学科において、入学センターの指導のもと、全教員が参加した入学者選抜会議を開催し、入学者選抜を行っている。	毎年度、入学センターの指導のもと、キャリアデザイン総合型選抜、指定校選抜、一般推薦入試、一般入試、共通テスト利用型入試の定員等について、全教員で点検、検討している。その結果を大学に提出し、承認を得ている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】	【長所】
	【特色】	【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】	【問題点】
	【課題】	【課題】 今後、偏差値の向上および入学者のレベル向上を目指すにあたり、さらなる少子化を迎えることになるので、入試制度による入学者割合をどのようにするか、入学センターとともに検討することが必要である。
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	本学科の教員組織の編成方針を作成し、大学、応用生物科学部の教育編成方針を踏まえ、本学科の最大の特徴である「食の安全」と「食の健康機能」に関する能力育成、教育指導に対する姿勢を明示している。	当学科の専任教員数は 17 名（うち女性 6 名）となっている。また今年度末に退官する教員がいるため、専任教員 1 名を採用し、組織の補強を行う。生物や化学を含め、教育上主要と認められる授業科目においてはすべて専任教員が担当している。教員が担当する授業数は、年間 15 時間前後としており、適切な配慮がなされている。10～20 年後の専攻の教員構成状況を考慮し、各研究室の教員の年齢はバランスよく構成されている。	教員の職位ごとの募集、採用、昇任等は、学則に則って行っている。本年度は、学則に従い、食品安全評価学研究室の助教の准教授昇格申請、分子機能学研究室の准教授の教授昇格申請、および生体環境解析学研究室の助教の准教授昇格申請を学則に従い行った。また食品安全評価学研究室教授の退官に伴う新規教授の採用（学内異動）についても学則に従い行った。	新型コロナウイルス禍であるものの、各種講習会がオンラインで開催されたため、大学で開催されるファカルティ・ディベロップメントの講演に学科の多くの教員が積極的に参加した。また、学生課が主催するハラスメント講習会にも多くの教員が参加している。	学期末に学生アンケートを実施し、その結果を各教員に配布し、次年度以降の授業に役立てるようにしている。さらに評価の低い項目については、各科目においても専攻全体としても改善措置を講じている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】	【長所】	【長所】	【長所】	【長所】
	【特色】	【特色】	【特色】	【特色】	【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】	【問題点】	【問題点】	【問題点】	【問題点】
	【課題】	【課題】	【課題】	【課題】	【課題】
根拠資料名					

学部・研究科名 応用生物科学部

学部長・研究科委員長名 山本 祐司

学科名・専攻名 栄養科学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	カリキュラム・ポリシーに基づいた授業科目を設置している。カリキュラム編成時には、学科教員会の下にワーキンググループを作成し、カリキュラム・ポリシーに沿った授業体系の編成を目指している。	フレッシュマンセミナー（1年次）や栄養科学特論（3年次）などの科目において、地域・産業界・官庁等で活躍している社会人による講演を行い、学生の学習意欲の動機付けにしている。	大学の評価基準に則り、単位認定を行っている。	栄養科学科のディプロマ・ポリシーをフレッシュマンセミナー（1年次）で説明している。また、各授業においても再度確認を行い、学生への意識付けを行っている。また、4年次に総合演習（一）（二）を開講し、4年間の総合学習を行っている。	授業評価アンケートを行い、授業内容の妥当性の把握と次年度に向けた改善を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・本学科が目指す管理栄養士像を教員間で共有し、各教員が担当科目の役割を意識して教育することができる。	【長所】 管理栄養士の活躍状況を知ることで、自らの卒業後をイメージしやすくなり、学習意欲の向上につながる。	【長所】 評価の基準点が明確であり、目標を持って取り組むことが出来る。	【長所】 学習意欲を高く保つことは管理栄養士国家試験に合格するために必須である。	【長所】 資格教育を行いつつ、学生のニーズを取り入れた授業を実施することを教員が意識できる。
	【特色】 ・厚生労働省が示す科目体系に、本学科が目指す農学、医学などの特色を加えた授業体系を編成している。	【特色】 病院や施設のみならず、様々な分野で活躍している管理栄養士の講演を行っている。	【特色】 国家試験受験資格を得るため、必要な単位数は多いものの、合格基準を明確にすることで着実にこなす意欲につながる。	【特色】 卒業時に管理栄養士国家試験を受験するため、学習成果が教員および学生にとって明確である。	【特色】 管理栄養士養成課程であるため、科目間のつながりが深く、一つの教科の改善が他教科にも影響する。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	アドミッション・ポリシーに基づき、各入学者選抜試験を行っている、合否判定会議は学科教員会で決定している。	入学定員に対する入学者数で判断している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・アドミッション・ポリシーに基づいて入学者選抜を適切に行うことは、卒業時に国家試験に合格し、社会で活躍できる管理栄養士の輩出に直結する。	【長所】 ・適正な入学定員数を維持できる。
	【特色】 ・	【特色】 ・適正な入学定員数を維持することにより、適切な授業運営ができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・入試制度が多岐にわたるため、本学科のアドミッション・ポリシーに必ずしも適合しない学生が若干名いる。	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・入試制度に関わらず、管理栄養士国家試験合格を全員が目指すよう入学早期から指導する必要がある。 ・大学入学後のリメディアル教育等を充実させ、入学後の就学に支障をきたさないようにする必要がある。	【課題】 ・なし
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	栄養科学科の教育研究目標に対して、各専門分野の教育研究に必要な専門性の高い教員の採用とその編成について方針を明定している。	栄養科学科の教育研究目標を達成するための専門性の高い教員組織の編成を行っている。	教員の募集、採用にあたっては、教育研究目標を達成するための専門性の高い教員募集、採用を行っている。昇任にあたっては、大学基準に則り、適切に行っている。	FDの組織的な実施を行っている。	適宜、行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・管理栄養士養成に必要な科目は多岐にわたるが、分野ごとに専門性を明示することで教育・研究の質向上にもつながっている。	【長所】 ・研究室内で教員同士の成長を促すことはもちろん、専門の異なる研究室間でも資格養成という教育目標を共有して互いに教育・研究の質向上に影響を与えている。	【長所】 ・就業年数ではなく研究業績や授業の担当状況などが昇格に影響することは、教員のモチベーションの向上につながる。	【長所】 ・組織的にFD活動を行うことで、本学科が目指す管理栄養士像を共有しながら改善に取り組むことが出来る。	【長所】 ・管理栄養士養成に必要な教育を再確認できる。
	【特色】 ・人間栄養学分野と食品栄養学分野に大きく分類している。	【特色】 ・研究室は専門分野に分かれているが、1年次の導入科目や4年次の総合科目は全研究室で受け持っている。	【特色】 ・採用に当たっては、特に管理栄養士養成に対する考えや意欲、科学的根拠を発信する研究力を重視している。	【特色】 ・教育の成果が管理栄養士国家試験の合格率として明確に現れる。	【特色】 ・質の高い管理栄養士養成ができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・学生の学力に幅があるため、国家試験対策が教員のオーバーワークに繋がってしまう。	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・一部の教員に負担が集中しないように、研究室担当教員も学生の試験対策指導にあたり、全員が業務を適切に分担する。	【課題】 ・なし
根拠資料名					

学部・研究科名 応用生物科学部
学部長・研究科委員長名 山本 祐司
学科名・専攻名 農芸化学科

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	「研究活動の活性化と研究成果の発信の推進」 1) 学科の研究内容の広報 2) 大学院進学率の増加 3) 論文・学会発表および外部研究費件数の増加
実行サイクル	1 年サイクル（2021 年度）
実施 スケジュール	1) 大学案内や学科パンフレットの内容を見直す。キャンパス見学会において「農芸化学」の理解についてのアンケート調査を行う。 2) 低学年の必修科目の中で、大学院教育・研究活動についての啓発を行う。 3) 自己点検システムへの入力を随時チェックする。科研費申請時期に注意喚起・情報交換を行う。
目標達成を測 定する指標	1) 様々な機会に学科に対する認識・理解に関するアンケートを行い、効果を評価する。 2) R2 年度実施 R3 年度大学院入試における進学者数から判断する。 3) 年度末に大学 HP の教員検索から論文・学会発表および外部研究費件数を集計する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1) 学外向けの学科の研究紹介の資料作成を業者へ依頼し、一部を作成した。本年はコロナ禍により、キャンパス見学会等によりアンケートが実施できなかった。 2) 1 年次生対象のフレッシュマンセミナー及び 4 年次生対象の農芸化学特論において、大学院進学の意味を説明した。2022 年度博士前期課程へは、志願者 40 名、入学者 37 名となり、昨年度と比較して、志願者は横ばい、入学者は 7 名増であった。 3) 学術論文 23 報、学会発表 123 件、著書・総説など 4 件
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし
	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 予算の都合上、学科の研究紹介の資料はその一部を作成するにとどまった。
	【課題】 次年度以降も継続して、予算内で資料作成を外部業者へ依頼、作成する。
根拠資料名	

学部・研究科名
学部長・研究科委員長名
学科名・専攻名

応用生物科学部
山本 祐司
醸造科学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	醸造・食品メーカーと提携して、インターンシップ型の学外実習を実施することにより、醸造科学の理論と実践を総合的に理解させる。	卒業研究を通して、発酵・醸造理論の理解を深めると共に、本分野における新たな課題の発見や解決法の模索、既存技術の改良や新技術の開発に繋がる発想やスキルを修得させる。	大学院への進学者数を増やす
実行サイクル	1 年サイクル（令和 3 年～4 年）	1 年サイクル（令和 3 年～4 年）	4 年サイクル（令和 3 年～令和 7 年）
実施 スケジュール	三年次生に「醸造科学特別実習」の積極的な履修を促し、学科とメーカー間で密な連携をとることにより、令和 3 年 12 月の清酒仕込み時期に合わせた二週間のインターンシップ型学外実習を実施する。	三年次より研究室に所属させ、卒業研究開始前に事前のトレーニングおよび研究室生活へ適応期間を設ける。四年次に一年間（常時担当教員のサポートの下で）個別の研究テーマを主体的に遂行させることを通して、醸造科学の知識・理論の運用や解析方法を実践的・統合的に修得させる。研究結果を四年次の年度末に卒業論文として纏めさせる。	一年次のフレッシュマンセミナーや共通演習等を通して、本学科の分野における研究の魅力や大学院修了者の活躍などを学生に紹介する。二年次・三年次においては、各教員の担当科目を通じて研究の魅力を印象づける。四年次には卒業研究の過程で進学する動機付けを行なうように指導する。
目標達成を測定する指標	以下の二つの指標を併せて到達度を判定する。 ・実習中は毎日日誌をつけることを課題とし、実習終了後に学科に提出させる。日誌の記載内容より学科教員が評価を行なう。 ・各企業の実習担当者より、実習終了時に実習態度・到達度合い等について評価をしていただく（評価報告書を学科に送付していただく）。	学生が所属する研究室教員との研究討論や発表会での内容から、研究室教員がスキルの修得状況を学生ごとに評価する。併せて卒業論文の内容を以って、総合的に到達度を判定する。	各年度の大学院進学者数により測定する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	令和 3 年 12 月 13 日(月)から 12 月 24 日(金)の二週間実施した。コロナ禍ではあったが、129 名の学生が 2～4 名のグループに分かれ、61 の企業等において実習を行った。	4 年生 157 名が所属研究室において、研究室教員の指導の下、卒業論文作成のための研究を行ない、研究成果の論文化を行なった。現 4 年次生は、3 年次から研究室に所属しトレーニング・引き継ぎを行った。	共通演習や各教員の授業・卒業研究指導を通して醸造科学分野の研究の魅力を学生に伝えた。2022 年度前期課程合格者は推薦入試 2 名、I 期入試 18 名、II 期入試 6 名の計 26 名、後期課程合格者は 3 名であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】多くの本学科卒業生経営の企業に協力いただいております、学科と実習先の連携がスムーズに行なえている。	【長所】最終学年において、教員と距離の近いコミュニケーションの中で、直接スキル修得ができる。	【長所】学生に進路についての選択肢の多様性を多くの機会に直接伝えられる。
	【特色】このような実習を成し得ているのは、全国的に見ても本学醸造科学科だけである。実学主義を体験できることが特色である。	【特色】4 年生全員が、研究室での実験や発表会を通して主体的に学びの場に参加する。	【特色】学科教員が多くの事例を紹介できる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】特になし	【問題点】前学期が就職活動期と重なる点が挙げられる。	【問題点】入学時の大学院進学希望率があまり高くない点が挙げられる。オンラインを積極的に活用することで、大学院での研究を紹介していく必要がある。
	【課題】特になし	【課題】学生と研究室教員のコミュニケーションをよくし、就職活動中も学生の卒業研究のモチベーションを損なわないように留意する必要がある。	【課題】大学院進学を視野に入れた大学受験生を集める工夫が必要であり、大学院生の研究内容を知ってもらう機会を増やす必要がある。
根拠資料名	資料①		資料②

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	学科共通機器の効果的運営のための基盤整備	発酵・醸造分野における研究発表、および外部資金の申請を積極的に行なう。	関連する公的機関や企業等との連携を推進する。
実行サイクル	4 年サイクル（平成 30 年～令和 4 年）	1 年サイクル（令和 3 年～4 年）	1 年サイクル（令和 3 年～4 年）
実施 スケジュール	ワーキンググループを立ち上げ、学科共通機器を運営するためのルールを策定する。策定したルールに則り、各研究室で積極的に共通機器を利用する。機器操作について講習会などを実施する。	各種関連学会・関連学術雑誌における発表を積極的に行なう。科研費を始めとする外部資金の公募時に積極的に応募する。	年間を通して、公的機関や関連業界の企業との共同研究等を積極的に行なう。
目標達成を測定する指標	ルールを策定し、既存の共通機器についてより多くの研究室が利用することを目標とする。	・学会発表は、学科で年間 18 件以上を目標とする。 ・外部資金申請は、学科で年間 5 件を目標とする。 ・原著論文投稿数は学科で年間 12 件以上を目標とする。	学科全体として、年間 10 件以上の公的機関或いは企業と連携することを目標とする。
自己評価 （☑を記入）	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学科共通分析機器の使用ルールを策定し、各研究室にて積極的に利用した。	論文発表数は、学科全体（6 研究室）で 20 件 学会発表は、学科全体で 26 件。 外部資金申請件数は、学科全体で 20 件。 今年度発表論文のうち、IF の高いものは 9.64 であった。	今年度の関連する公的機関や企業との共同研究数は、学科全体で 62 件であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】最新の機器を利用することで、新たな発見につながる事が期待される。また、共通機器を特定研究室が管理することで大きな故障等を起こさずに運用できている。	【長所】目標を達成し、順調であると考えられる。特に、原著論文投稿数、外部資金申請件数、学会発表件数が前年度を大幅に上回った。	【長所】各研究室が、それぞれの担当領域に応じた適切な連携を行なっている。
	【特色】これまでに明らかにされていない醸造物中の新規な成分の発見につながる。	【特色】発酵・醸造分野においてレベルの高い研究を実施できており、各研究室で活発な研究発表と論文発表が行われている。	【特色】学科の特色を反映した明解な連携が多い。また、新規企業との連携も始められており、地域活性化に関わる共同研究を実施している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】各教員の研究時間の確保が難しく、全ての研究室にて運用できていない。特定管理者のみの留まらずワーキンググループを積極的に活用していく必要がある。	【問題点】教員の研究時間の確保が難しい。	【問題点】特になし
	【課題】勉強会などを行っていくことで、各研究室でも運用できるようになることが望ましい。また、次年度以降の共通機器購入のための議論も必要である。	【課題】英語の学術論文への投稿を増やし、引き続き論文投稿を継続していく。また、研究成果の発表および外部資金の獲得を積極的に行なう。	【課題】特になし
根拠資料名	資料③	資料④	資料④

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	新年度初めに新入生に対するアンケートを実施し、本学科受験生の傾向や動向についての把握に努める。	研究室体制の整備。	教務以外の場面においても、教員が積極的に学科学生との親睦に努める。
実行サイクル	____ 1 ____ 年サイクル（令和 3 年～令和 4 年）	____ 1 ____ 年サイクル（令和 3 年～4 年）	____ 1 ____ 年サイクル（令和 3 年～令和 4 年）
実施 スケジュール	新年度の早い段階に、フレッシュマンセミナーにおいて新 1 年生全員を対象にアンケートを実施する。アンケート結果を集計し、本学科を受験する受験生の傾向や本学科を受験するに至った経緯、より発信が望ましい情報などについて学科として検討を行なう。	新研究棟移転後の各研究室の整備を進めるとともに、研究室間での研究交流を活発に行い、研究力の向上を目指す。専任教員数が少ないこともあり、人事計画に則り適切に人員配置を行う。	・前期終了時に、本学科教員主催で新入生歓迎会を開催する。 ・ 8 月末頃より、教員が手分けして醸造科学科統一本部の活動をサポートし、収穫祭の成功を支援する。
目標達成を測定する指標	アンケート結果を整理してデータ化し、学科教員全員で共有する。それを、オープンキャンパスや学科 HP・大学案内等での情報発信を有効に行なう上での基礎情報として利用すること。	研究室間での協力回数や成果物等の数、新規教員の採用数で評価する。	上記各種イベントの実施すること。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	コロナ禍における学生サポートなどにより、アンケートを実施することが出来なかった。本学に入学した学生の出身高校や高校ランクを再調査した。	移転後の研究室整備も完了し、円滑な研究室活動が遂行できていると思われる。人事計画について、新規採用教員は 2 名であり、専任教員確保も計画通り進行したと思われる。	新入生歓迎会を昨年度未実施分と合わせてオンラインで 2 度開催し、学生と教員との親睦を図ることが出来た。コロナ禍のため研究室対抗の競技は開催できなかった。収穫祭はオンライン開催となったが、実際のパネル作製や味噌販売など醸造科学科統一本部の活動を一部サポートした。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】入学者の出身高校などの調査は、次年度以降の入試へ活用できる。	【長所】なし	【長所】学生と教員が親密な関係を気づくことができ、研究室間交流も活発になる。
	【特色】なし	【特色】学生の円滑な研究活動が実施できる。	【特色】なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】なし	【問題点】なし	【問題点】コロナ禍により全員での対面実施ができていない。
	【課題】再調査するだけではなく、実際の受験生確保に活用する。	【課題】1 研究室 2 名体制の研究室があるため、計画的に人事を遂行していく。	【課題】なし
根拠資料名			資料⑤-1, ⑤-2

学部・研究科名 応用生物科学部
学部長・研究科委員長名 山本 祐司
学科名・専攻名 食品安全健康学科

2. 研究に関する総合的事項

	①	②
目 標	食の流通のグローバル化によって、市場には新たな食材や加工食品があふれ、人々は豊かな食文化を楽しむ一方で、在来・外来の食材が食の安全を脅かす危険から自分たちを守る必要が生じている。こうした「食の安全・安心」をはじめ「食の機能と健康」を科学的に解明する研究拠点である食品安全健康学科の教育・研究内容について、あらゆる機会を通じて広く社会に発信する。	食品安全科学分野および健康機能科学分野における研究発表、外部資金の申請を積極的に行う。
実行サイクル	1 年サイクル（令和 3 年～ 4 年）	1 年サイクル（令和 3 年～ 4 年）
実施 スケジュール	1. キャンパスツアーや学部学科説明会で、本学科の教育・研究内容を紹介する。 2. 高校生を対象とした訪問授業を行い、本学科の教育・研究内容を紹介する。 3. オープンキャンパスにおいて、本学科の教育・研究内容を紹介する。 4. 広く雑誌媒体等により、本学科の教育・研究内容を紹介する。 5. 雑誌・書籍などを通じて本学科教育、研究の主旨を広く伝えていく。	1. 関連学会、関連学術雑誌における発表を積極的に行う。 2. 科研費、研究財団が行っている研究助成など外部資金に積極的に応募する。 3. 企業が関心をもつようなテーマを積極的に設定し、企業からの委託研究の機会を増やす。
目標達成を測定する指標	1. 3. に関しては、参加人数により確認する。 2.に関しては、派遣教員の人数、並びに模擬講義での聴講者の人数により確認する。 4. 5 に関しては、掲載数、その媒体の販売部数により確認する。	1. 学会発表数を確認する。 2. 学会、学術雑誌発表数を確認する。 3. 外部資金への応募数を確認する。 4. 委託研究（共同研究）数を確認する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	5 月 30 日に開催したオンラインキャンパスツアーでは申込者 77 名、参加者数 89 名であった。模擬講義については、数件依頼があったものの、新型コロナウイルス感染防止の観点からすべてキャンセルとなった。取材問合せ数は 12 件あり、うち 11 件が各種媒体に掲載された。	1. 学会発表数は全教員で延べ 73 題であった。 2. 学術雑誌発表数は延べ 39 報であり、本学科の研究を世界的に周知した。 3. 外部資金への応募数は全教員で 25 件、採択数は 10 件であった。 4. 委託研究（共同研究）数、全教員で 41 件であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】	【長所】 委託研究（共同研究）数が、昨年度の 25 件から 41 件に大きく増加した。
	【特色】	【特色】 本学科で行っている研究を学会および学術雑誌で積極的に発表できた。また昨年度と同様に、外部資金への応募および企業との委託研究（共同研究）により、充実した研究・研究環境を整えようと努力した。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 新型コロナウイルス感染症禍とはいえ、高校等での模擬講義が実施できなかった。	【問題点】
	【課題】 模擬講義を積極的に行い、さらに当学科の周知度をあげていく必要がある。	【課題】
根拠資料名		

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	今後の食品企業では、安全・安心という「守り」と、機能性食品などの新たな市場への「攻め」のそれぞれに対応できる、攻守のバランスのとれた人材が求められているといえる。また行政にとっても、食品市場の環境が変化していく中で食の安全・安心を守るための取り組みと、ますます多様化する機能性食品市場を規制する取り組みが必要で、やはり同様にバランスがとれた人材が求められている。このような背景のもと、本学科のディプロマポリシーにある「食品安全健康学科は、食の安全と健康機能の専門領域における確かな知識と技術、研究能力を修得し、食の安全と健康機能上の問題解決力を身に付けている人材」であることを広く食品企業等関連業界に周知させる。
実行サイクル	____ 1 ____ 年サイクル（令和 3 年～ 4 年）
実施 スケジュール	1. 本学主催の企業懇談会（ZOOM）に出席し、多くの企業に本学科の教育について説明する。 2. 学会の懇親会・交流会に積極的に参加し、企業関係者への学科 PR を行う。
目標達成を測定する指標	1. 企業懇談会で名刺交換した企業数を確認する。 2. 参加学会を確認する。 3. 問い合わせを受けた企業数を確認する
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	1. 本学主催の ZOOM による企業懇談会には、6 名の教員が参加し、企業に当学科および当学科の学生について周知した。 2. 参加学会数は、全教員で 77 件であった。 3. 問い合わせを受けた企業は、全教員で 52 件であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】
	【特色】 本学科で行っている研究を企業懇談会および学会の懇親会・交流会で、企業関係者に PR できた。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】
	【課題】
根拠資料名	

学部・研究科名
学部長・研究科委員長名
学科名・専攻名

応用生物科学部
山本 祐司
栄養科学科

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	管理栄養士として必須の栄養科学・食品科学の分野における研究活動を推進し、その研究成果を種々の手段により、国内外の社会に発信する。また、様々な研究助成からの外部資金の取得を試み、研究活動の推進に繋げる。
実行サイクル	1 年サイクル（令和2年～3年）
実施 スケジュール	(1) 栄養・食品科学分野に関連する国内外の学会へ参加する。 (2) 栄養・食品科学分野に関連する和文誌や国際誌へ投稿する。 (3) 外部資金獲得のために、科研費、財団の研究助成、学内プロジェクトなどに申請する。
目標達成を測定する指標	達成度を判断するための指標としては、教員の学会発表演題数、掲載論文数、外部資金への申請数などを確認する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	(1) 多くの教員が栄養・食品科学分野に関連する国内外の学会へ参加し、24 演題を発表した。 (2) 多くの教員が栄養・食品科学分野に関連する和文誌や国際誌へ投稿し、和文 13 報、英文 20 報、計 33 報発表した。 (3) 個人もしくはグループで外部資金獲得のために、科研費、財団の研究助成、学内プロジェクトなどに 29 件の申請を行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・教員が卒業研究指導を通じて研究を行い、研究成果を公表していくことは、教員及び学生双方にとって意欲の向上につながる。
	【特色】 ・科学的根拠に基づいた栄養管理・栄養指導が行える管理栄養士の輩出に貢献することができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし
根拠資料名	令和3年度活動報告書

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	農学と医学の領域を融合させた高度な専門的知識および技術を有し、社会に貢献できる管理栄養士を育て、病院や介護施設、食品企業、行政機関などに輩出する。
実行サイクル	__1__ 年サイクル（令和2年～3年）
実施 スケジュール	(1) 学生への意識付けのために地域・産業界・官庁等で活躍している社会人による講演を1年次のフレッシュマンセミナー等にて実施する。 (2) 地域・産業界・官庁等との連携をとるために、たとえば地域での健康推進事業等を積極的に推進する。
目標達成を測 定する指標	(1) 社会人による講演のレポート課題を通して学生の認識を確認する。 (2) 地域・産業界・官庁等との連携状況を確認する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	(1) 社会人による下記の講演を実施し、提出レポートにて管理栄養士の社会貢献への認識を確認した。 1年生：フレッシュマンセミナー 「共生社会・生きやすい社会を考える～難病から学んだ私が伝えたいこと～」(希少難病ネットつながる・香取久之先生) 「病院栄養士について」(国立病院機構 渋川医療センター・須永将広先生) 「オリパラ直前企画：トップアスリートのサポート最前線」(独立行政法人日本スポーツ振興センター、国立スポーツ科学センター・袴田智子先生) 3年生：栄養科学特論 「病院で働く栄養士」(日本医科大学付属病院・宿谷かずな先生) 「管理栄養士・栄養教諭の仕事」(東京農業大学稲花小学校・梅本葉月先生) 「最新の栄養科学(2021)」(公立碓氷病院・上原由美先生) 「食品会社における管理栄養士のはたらき方」(株式会社ヤヨイサンフーズ・廣瀬千明先生) 「中間原料メーカーって知ってますか？」(池田糖化工業株式会社・佐藤大祐先生) 「キノコの科学」(国立医薬品食品衛生研究所・渡辺麻衣子先生) (2) 地域・産業界・官庁等との連携状況。 資料のとおり、25件の連携を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・管理栄養士の活躍状況を知ること、自らの卒業後をイメージしやすくなり、学習意欲の向上につながる。また、教員が産学連携や地域の健康推進事業などに関わることで、社会における管理栄養士の役割を確認し、学生教育に還元することができる。
	【特色】 ・管理栄養士は様々な分野で活躍しているが、入学までに具体的な情報を得ることは難しい。そのため、入学当初のフレッシュマンセミナーで様々な管理栄養士像を知ることによって学ぶ意欲の向上につなげる。そして就職活動に先立って3年後期に具体的な活躍状況を知ること、将来の方向性を考える情報源となる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし
根拠資料名	令和3年度活動報告書